

第 60 回日本産科婦人科学会・学術講演会

シンポジウム 4 「産婦人科医不足の解消を目指して」

(1) 産婦人科医の人的改善—研修医の教育・勧誘には何が必要か

東海大学医学部専門診療学系産婦人科学

准教授 松林 秀彦

Human Resources in Obstetrics and Gynecology—What is Important to Recruit Super-rotate Doctors in Post-graduate Training Programs

Hidehiko MATSUBAYASHI

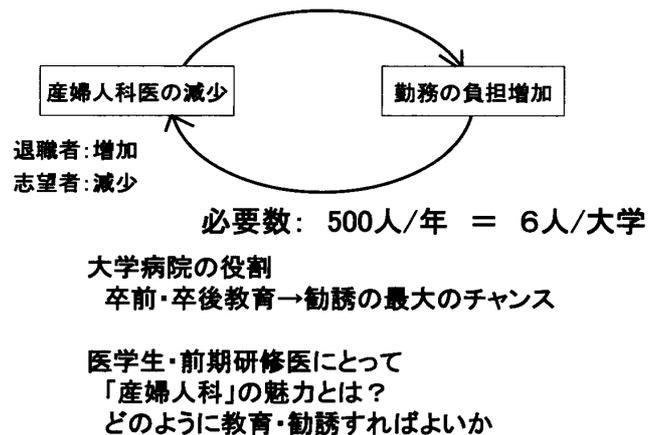
Department of Obstetrics and Gynecology, Specialized Clinical Science, Tokai University School of Medicine, Kanagawa

はじめに

産婦人科医の減少と勤務の負担増加は日々痛切に感じているところですが、産婦人科の志望者を増加させなければこの状況は改善されません。当然、医学生時代も前期研修医(スーパーローテート)時代も産婦人科医師との交流があるわけであり、この機会を逃しては産婦人科医の増加はありません。卒前・卒後教育の重要性は単に産婦人科学を教えるだけではなく、勧誘のチャンスと捉えなければ、産婦人科医の減少に歯止めをかけることはできません。医学生あるいは前期研修医が「産婦人科」の魅力とをどのように考えているのか、質問票調査により明らかにするとともに、どのように教育・勧誘すればよいか、その対策について考察致しました(図 1)。

海野教授の報告によりますと、退職者の分を加味して、毎年 500 名の新人産婦人科医が必要になります。80 大学で割り算を行いますと、1 大学あたり 6 名の産婦人科医が必要な数字です。これは、非常に大変な数字であります。

卒前教育では講義(座学)と臨床実習、卒後教育



【図 1】産婦人科医減少の悪循環

では実地教育であります。当大学産婦人科では 4 年時に 45 コマの講義、5 年時に 2 週間の臨床実習(クリニカルクラークシップ 1)、6 年時に希望者を選択で 1 週間の臨床実習(クリニカルクラークシップ 2)、医師 2 年時に 1 カ月の産婦人科必修研修(希望者には 2 カ月 1 単位で最大 3 単位までの選択も別途あり)を行っています。このわずかな期間に如何に魅力ある産婦人科とその将来をアピールできるかが産婦人科医師勧誘の勝負の分かれ目になります。ここで、注目して頂きたいのは、6

Key Words: Super-rotate systems, Human resources, Post-graduate education, Pre-graduate education, Zeal

医学部4年:講義45コマ(約100名)
 医学部5年:臨床実習2週間(4~5人単位)
 クリニカルクラークシップ1

医学部6年:選択臨床実習1週間(希望者のみ、2名単位)
 クリニカルクラークシップ2

研修医1年:接点なし

研修医2年:産婦人科必修研修1カ月
 産婦人科選択研修2カ月(希望者)

このわずかな期間に如何に魅力ある産婦人科とその将来をアピールできるかが産婦人科医師勧誘の勝負の分かれ目である。

【図2】東海大学における医学生・研修医との接点

年時と研修医1年目ではほとんど接点がないことであります(図2)。

本論文では、研修医2年目、医学部5年生・4年生のアンケート調査を行い、今後の産婦人科医師勧誘のあるべき姿につき考察しました。

1. 研修医2年目¹⁾

厚生労働省スーパーローテート制度発足の1期生61名(平成17年度=研修2年目)、2期生48名(平成18年度=研修2年目)、3期生56名(平成19年度=研修2年目)の合計165名に対し、産婦人科研修前と研修後にアンケート調査を行い、その興味と志望診療科を尋ねました(図3)。興味ある分野は複数回答可で、産科、腫瘍、内分泌、免疫、不妊症、体外受精、不育症、更年期、思春期、合併症妊娠、婦人泌尿器、心理(精神医学)、新生児、手術、内視鏡、遺伝子、再生医療、幹細胞(ES細胞)の18分野から選択する形式としました。また、研修医の興味に従い、各人1つのテーマを決めて研修終了時に発表して頂きました。さらに、最終的に選択した診療科がどうであったかについても併せて検討しました。

東海大学のスーパーローテートは、1年目に内科、外科、麻酔科、神経診断学の基本科目を、2年目に救命救急、産婦人科、小児科、精神科、地域保健医療の必修科目に加え、2カ月単位の自由選択を3種類選択することができます。しかし、2年目の10月(平成17年度)あるいは11月(平成18、19年度)といった研修の途中で進路を決定しなければならぬため、自由選択科目が進路提出

1 研修医(研修医2年目)

厚生労働省スーパーローテート制度

1期生(平成17年度):61名

2期生(平成18年度):48名

3期生(平成19年度):56名

合計:165名

【図3】調査対象(研修医2年目)

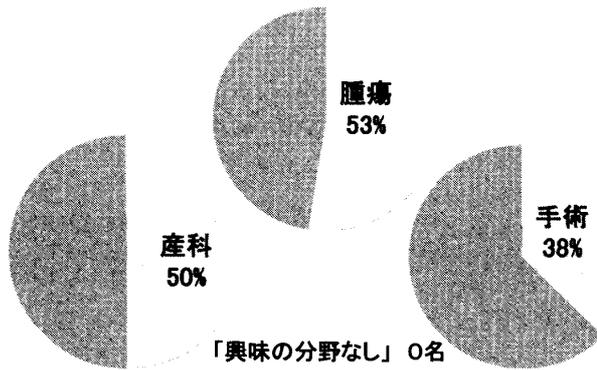
1年目	内科-1(基本科目)	3カ月
	内科-2(基本科目)	3カ月
	外科(基本科目)	3カ月
	麻酔科(基本科目)	2カ月
	神経診断学(基本科目)	1カ月
2年目	救命救急(基本科目)	2カ月
	産婦人科(必修科目)	1カ月
	小児科(必修科目)	1カ月
	精神科(必修科目)	1カ月
	地域保健医療(必修科目)	1カ月
	選択-1	2カ月
	選択-2	2カ月
選択-3	2カ月	

*2年目の10(11)月末日に進路志望を提出する

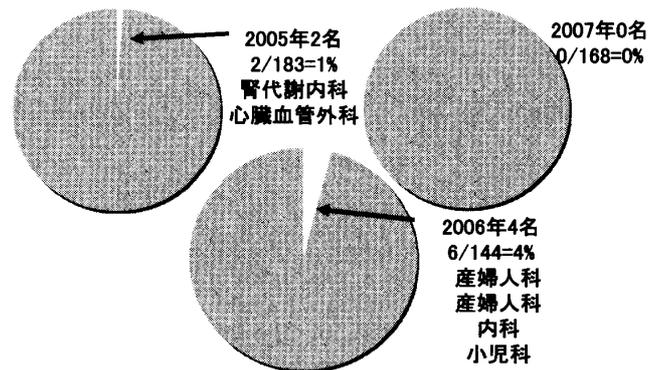
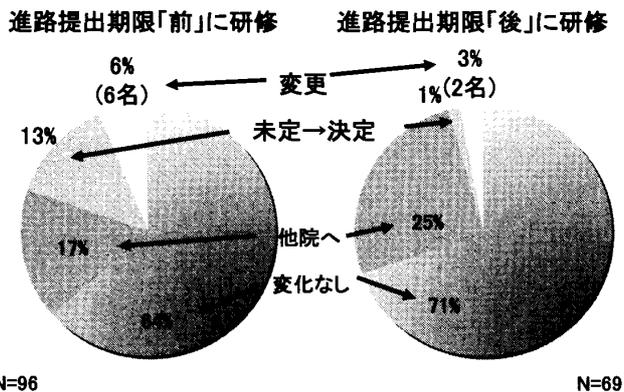
【図4】東海大学におけるスーパーローテート

後になったり、産婦人科研修が進路提出後になってしまうことが約半数の研修医に認められます(図4)。厚生労働省の取り決めでは、1年目に産婦人科をローテートすることが認められていなかった訳ですが、平成20年度からは、多少自由度の高い選択が認められることになりました。つまり、研修医1年目での産婦人科選択が可能になりました。これは、接点のブランク解消という意味においても朗報であります。

研修医の興味ある分野は多い順に、腫瘍53%、産科50%、手術38%となっており、興味のない研修医はいませんでした。当大学では1カ月という短い研修期間であり、病棟業務を中心とした研修では産科および婦人科腫瘍の患者さまの診療が中心となります。つまり、研修できた分野への興味生まれ、研修できなかった不妊症などの生殖医療の領域への興味は少なくなっていました



【図5】研修医2年目の興味ある分野(研修後)

【図7】産婦人科選択研修の選択率と研修医の進路
(希望者に2ヵ月1単位)

N=96

N=69

【図6】研修終了時の志望診療科と実際に選択した診療科

(図5). 全国的に産科医療が大きな社会問題になっている中でも, 半数の前期研修医に産科への興味は認められたことは, 驚きでもありました.

研修終了時の志望診療科と実際に選択した診療科を見ますと, 進路提出期限前に研修した96名の中で, 未定であった者は13%, 変更した者は6%でありました. 一方, 進路提出期限後に研修した69名の中で, 未定であった者は1%, 変更した者は3%でありました. つまり, 進路提出期限前に研修した医師において81%は変更不可能, 進路提出期限後に研修した医師では96%が変更不可能ということになります(図6).

もともと産婦人科に興味を持っていた研修医は, 自由選択で産婦人科を2ヵ月単位で研修することができ, 産婦人科への教育・勧誘としてもきわめて重要です. しかし, 過去3年の選択率はわずか0~4%であり, あまりにも少ないと言わざるを得ません(図7).

以上により, 研修医2年目のみでの産婦人科へのリクルートは非常に難しいこととなります. つまり, 学生の段階でいかに多くの方に産婦人科へ興味を持って頂けるかが重要になります.

2. 医学部5年生

そこで, 医学部5年生の段階での調査を実施致しました. 平成18年10月より研修医と同様なアンケート調査および進路調査を, 医学部5年生の2週間の臨床実習(クリニカルクラークシップ1)の終了後(採点后)に行い, その122名について検討しました(図8).

当大学での医学部5年生の臨床実習は, わずか2週間であり, 前半後半に分けて産科と腫瘍を1週ずつ回るといふものです. 生殖医療はその合間にスタンプラリー形式で見ることになります. 2週目の終了後に試験を行い, 合否の判明後に会食をしています. 今回のアンケート調査はこの会食の際に行いました(図9).

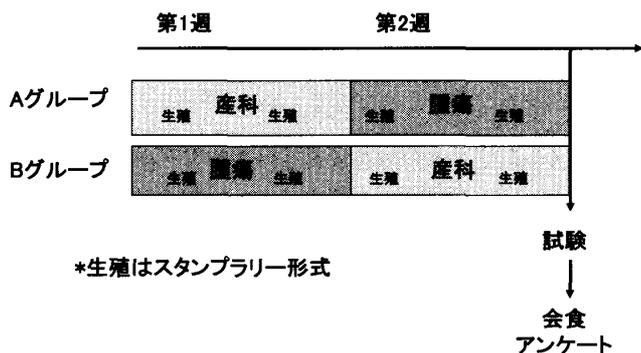
医学部5年生の興味ある分野は多い順に, 腫瘍66%, 産科64%, 手術54%となっており, 研修医のものと全く同じ順番でしたが, 非常に高率でした. 興味の分野がない5年生は2名(2%)でした. やはり2週間という短い実習期間では, 産科および婦人科腫瘍の患者さまの実習が中心となります. したがって, 実習できた分野への興味は多く, 実習できなかった分野への興味は少なくなっています(図10). 産科バッシングが続く中でも, 産科への興味は2/3の学生に存在しています.

2 医学部5年生

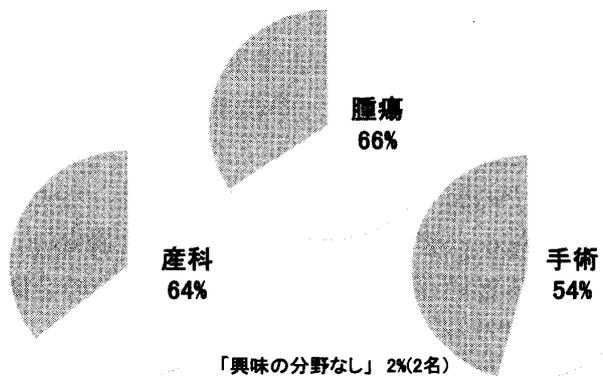
平成18年10月～平成19年2月: 33名
 平成19年3月～平成20年2月: 89名
 合計 122名

【図8】 調査対象(医学部5年生)

2週間(4～5人単位)
 クリニカルクラークシップ1



【図9】 医学部5年生の臨床実習

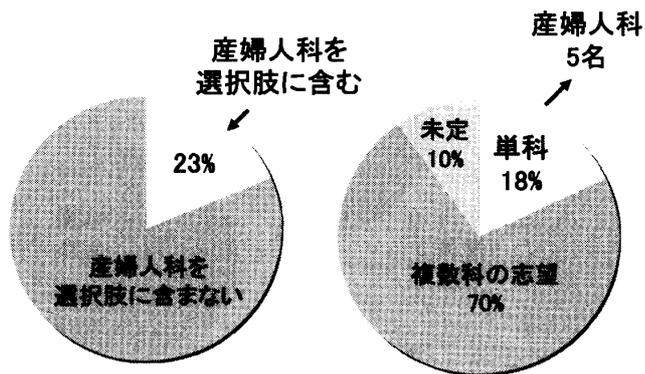


【図10】 医学部5年生の興味ある分野(臨床実習後)

進路の中で産婦人科を選択肢に加えている学生は23%にも及びました。将来の進路を既に単一の診療科に定めている者は18%(このうち産婦人科志望は5名)で、10%が全くの未定、複数の志望を持つ者は70%でした(図11)。つまり、医学部5年生の段階では、産婦人科へのリクルートに多くの可能性を持っていることになります。

3. 医学部4年生

さらにさかのぼり、私たちが公に接することの

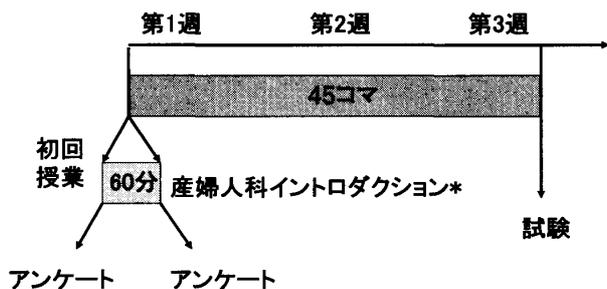


【図11】 医学部5年生の志望の診療科

3 医学部4年生

平成19年6月講義: 104名

【図12】 調査対象(医学部4年生)

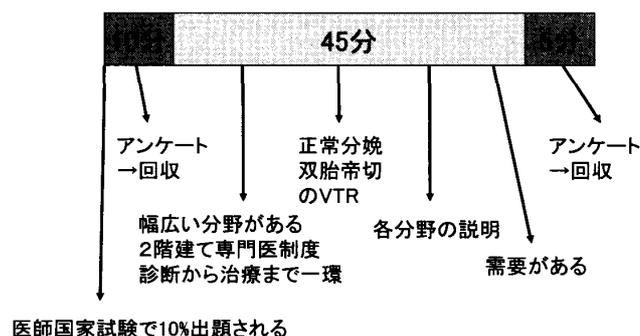


*2007年より開始の授業

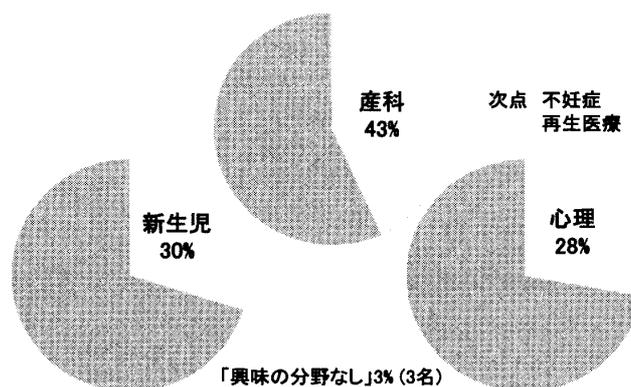
【図13】 医学部4年生の産婦人科講義

できる医学部4年生での調査を実施致しました。平成19年6月の医学部4年生の産婦人科の最初の講義の前後に同様なアンケート調査を行い、その104名について検討しました(図12)。

当大学での医学部4年生の授業は、全部で45コマ(1コマ1時間)であり、わずか3週間の間に集中的に行われます(図13)。学生教育の重要性を再認識した平成19年度の授業から新たに勧誘用の授業として3コマを追加しました(もちろんタイトルには「勧誘」の文字は含まれません)。その最初の授業を筆者が受け持ち、産婦人科のイントロダクションを行いました(図14)。授業の前後にはアンケート調査を行い、授業内容は産婦人科がいかに重要で興味深い学問であるかを将来の展望(夢)を含めて力説しました。筆者の第3子誕生の

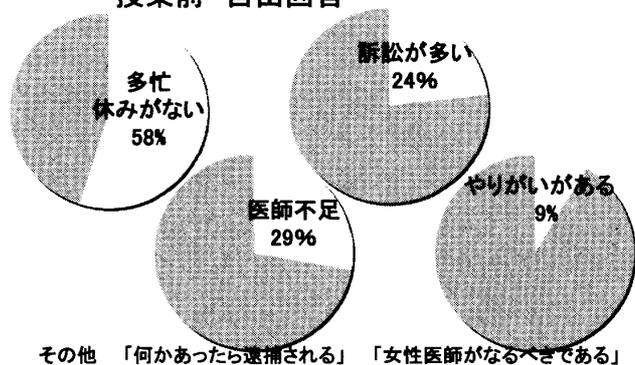


【図14】 医学部4年生の産婦人科導入授業内容



【図16】 医学部4年生の興味ある分野(導入授業後)

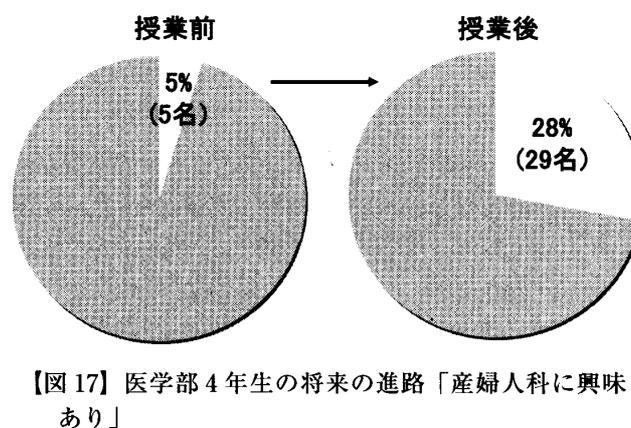
4年生「産婦人科のイメージは？」 授業前 自由回答



【図15】 医学部4年生の産婦人科授業前の「産婦人科の印象」

経膈分娩のVTRと学生教育用に許可を頂き撮影した双胎の帝王切開のVTRをそれぞれ3分に編集したものを流しましたが、学生に対してこれは非常に大きなインパクトを与えたようです。最近では、臨床実習での学生の分娩の立ち会いに患者さまやご家族の理解が得られない場合が少なくな（特に男子学生において）、あるいは実習時間を夜間にとることが難しいというご時世から、実際に分娩を見学することができない場合も多々あります。そこで、強烈にアピールできる分娩を実際に講義で全員に見せてしまおうというのが、最大のねらいでした。

医学部4年生の産婦人科初回の講義開始前に、産婦人科についてのイメージを自由に記入してもらいましたところ、「多忙(休みがない)」58%、「医師不足」29%、「訴訟が多い」24%、「やりがいがある」9%という回答でした。また、「何かあったら逮捕される」という回答や、「女性医師がなるべきで



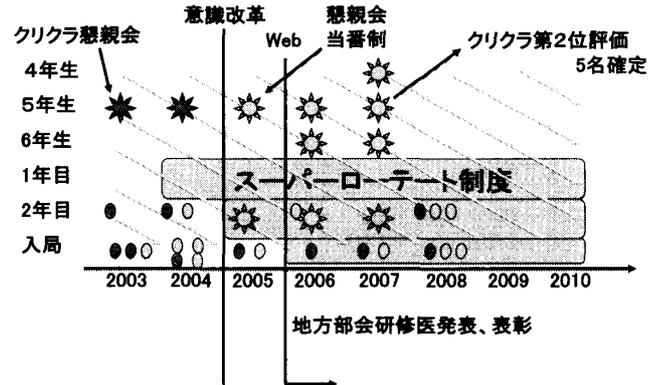
【図17】 医学部4年生の将来の進路「産婦人科に興味あり」

ある」という男性の意見も多くありました(図15)。これらは、一般的なメディアの作ったイメージをそのまま反映したものと考えられます。特に福島の件の影響力は絶大であり、メディアの言動によって産婦人科のイメージが大きく左右されることを示しています²⁾。また、女子学生が半数近くを占めるようになった現在の医学部の中では「産婦人科医は女性になるべきである」とまことしやかに言われているのであります。女性医師の就業は避けられないのですが、他科よりきわめて突出して女性医師が多い産婦人科の現状からは、就業体系や活用策など抜本的な見直しが望まれます³⁾。一方で、男性医師のリクルートに特に積極的に力を注いでいかなければならないのであります。

医学部4年生の興味ある分野をこの授業の最後に尋ねたところ、多い順に、産科43%、新生児30%、心理28%であり、次点に不妊症と再生医療がありました。これらは講義した分野に他なりません。なお、興味のない分野がない4年生は3名(3%)

- 研修医**
 2005〜 必修研修での研修発表→CDR作成
 2006〜 神奈川地方部会と協力→研修医発表、表彰、論文作成
- 学生**
 2003〜 クリクラ懇親会(打ち上げの会)
 2005〜 懇親会当番制→医局員の意識統一
- 研修医・学生**
 2006〜 医局行事への積極的な参加呼びかけ
 (勉強会、医局旅行、納涼会、忘年会など)
- 他大学研修医**
 2006〜 ホームページ作成(広報)

【図 18】 東海大学における熱意ある取り組み(一覧)
 クリクラ：クリニカルクラークシップ実習



【図 19】 東海大学における熱意ある取り組み(時系列)
 ★実施 ☆熱意ある実施 ●女性 ○男性
 クリクラ：クリニカルクラークシップ実習

でした(図 16)。

授業開始前には「産婦人科に興味あり」はわずか5%(5名)でありましたが、たった1時間の授業後に「産婦人科に興味あり」は28%(29名)に増加しました(図 17)。学生は、「熱意を持って教えれば、それに応える」ということを示しています。

4. 東海大学における熱意ある取り組み

東海大学における現在までの取り組みを図 18, 19 に示しました。

研修医に対しては、スーパーローテート当初の2005年度より必修研修での研修発表を行い、それを年度ごとに1枚のCDRにまとめて、研修医へ差し上げています。さらに2006年度からは、神奈川地方部会と協力し、地方部会での研修医発表コーナーを設けて発表して頂き(4大学+他の研修施設)、懇親会で表彰し、さらに論文作成の指導を行っています。

学生に対しては、以前より5年生のクリニカルクラークシップ(クリクラ)実習後の懇親会を行っていました。当初は医局長が担当することになっており、2003年頃からは筆者が担当していましたが、2005年度より懇親会を医局員全員の持ち回りによる当番制としました。これは、医局員全員の意識統一が勧誘には必要不可欠であると感じたからであります。担当しない医師は自分とは無関係であるような錯覚に陥りがちで、産婦人科に興味を抱いた学生や研修医に対して「忙しいからやめておけば」という軽はずみな発言をしてしまいま

す。日本の将来のために、あるいは自分の将来のためにも後輩のリクルートは欠かせないものであることを認識し、医局員全員で同じベクトルを持って一致団結して進んでいくことが重要と考えます⁴⁾。これは、まとまりのある良い医局であることをアピールすることになります。意識改革を行って3年目にあたる昨年度は、クリニカルクラークシップの評価において全科のなかで第2位を得ることができました。これは10名弱の6年生の自主的な臨床見学(実習)にも結びつき、6年次のブランク解消にも一役買っています。

また、研修医や学生に対しては、2006年度より医局行事への積極的な参加を呼びかけ、勉強会、医局旅行、納涼会、忘年会などに一緒に参加して頂き、お互いに打ち解けた楽しい雰囲気を作るように心がけています。

さらに他大学の医学生や研修医に対して、2006年度にホームページを作成致しました。患者さま向けの部分もありますが、最大の目的は研修医獲得への広報活動に他なりません。これにより、今まで毎年の見学者は1~2名でしたが、昨年度は10余名の医局見学がありました。

このような取り組みの結果(図 19)、スーパーローテート制度発足後の入局者は1名(2006年)、2名(2007年)、3名(2008年)とかなり確保されましたが、1年前の調査ではそれぞれ0名、1名、0名だった訳であり、大変な努力をした結果であります。増えた5名の内訳は、必修研修での熱

「熱意を持って教育する」

医局員が一丸となる

マイナスイメージの払拭

産婦人科(特に産科)に興味はある

正しい知識を教える

経験(教育)した分野の興味が増加

医学部4年生・5年生: 勧誘に大きな可能性がある
→彼らの多くを引きつけることは可能

医学部6年生・研修医1年目
→このブランクの2年は非常に大きい

研修医2年目: 多くは既に志望を決めている(81~96%)
→他科志望を逆転することは極めて困難

【図 20】 産婦人科医勧誘に必要な心がけ

き研修医教育により3名, 地方部会での研修医発表により1名, ホームページにより1名であります。一方, 私たちが意識改革を行った2005年度に5年生であった学生は, 2009年度に入局することになります。現在3名の志望者がおりますので, ようやくこれまでの努力が報われようとしています。2007年度クリニカルクラークシップ評価第2位の学年は2011年度の入局でありまだ3年も先になります。このように, 学生の教育・勧誘の取り組みは非常に息の長い仕事であり, 一朝一夕に入局が増える事はありません。それまで, 継続して医局員が一致団結して歩んでいくことが肝要であります。

おわりに

「熱意を持って教育する」「医局員が一丸となる」ことが最も大事で, メディアによるマイナスイメージを払拭し正しい知識を教えるためには, 熱く語れる時間や機会を設けなければなりません。産婦人科, 特に産科に対して興味を持っている学生は実際多く存在し⁵⁾, 経験(教育)した分野の興味が増えるのは人間としてごく自然のことです(図20)。

「日本の将来のために産婦人科医を増やそう」というスローガンを掲げ, 自分の大学(あるいは病院)の産婦人科でなくともよいので, 一人でも多くの産婦人科医をリクルートし育て上げることは, すべての産婦人科医師の責務と考えます。医学部

産婦人科医全員の意識統一 「日本の将来のために産婦人科医を増やそう」

卒前教育が最も重要

まず、産婦人科に興味を持ってもらう努力



将来の選択枝のひとつに加えてもらう

医学部1~3年生→アピールの機会をつくる
医学部4年生・5年生→授業・実習での熱意
医学部6年生・研修医1年目

→ブランクをつくらないように努力

(6年生: 選択臨床実習者を増やす)

研修医2年目→選択研修者を増やす努力

【図 21】 卒前教育における産婦人科医全員の意識改革

4年生・5年生の時点ではまだ勧誘に大きな可能性があり, たった1コマの授業でも, たった2週間の臨床実習でも彼らの多くを引きつけることは可能であります。研修医でも, 数は少ないですが他科志望を逆転することもできます。多くの場合, 経験(教育)した分野の興味が増え、「熱意を持って教育する」ことが最も重要なこととなります。しかしながら, 「可能性」という観点からは, 卒前教育が最も重要であり, 一人でも多くの学生に産婦人科に興味を持ってもらう努力を惜しまないことが肝要であります。そのためには, 医学部低学年の段階からの積極的なアピールも必要になります(図21)。このような努力の結果, 将来産婦人科医が1大学あたり6名ずつ入局し, 年間500名の新人が研修できる日を目指して, 全国の産婦人科医が一致団結して欲しいと考えます。

謝 辞

本シンポジウム発表の機会を与えて下さった, 第60回日本産科婦人科学会会長 岡村州博教授ならびに座長の労をお執り頂いた水上尚典教授, 倉智博久教授に深謝致します。

調査協力者

現医局長: 村松俊成

研修医教育担当: 鈴木隆弘

研修教育部：和泉俊一郎

総括：三上幹男

医 局 員

杉 俊隆, 森 晃, 村上 優, 前田大伸, 平澤 猛, 貴家剛, 内田能安, 信田政子, 井面昭文, 渡辺未央, 近藤朱音, 池田仁恵, 塚田ひとみ, 菊池公孝, 呉屋憲一, 渥美治世, 飯田哲二, 東郷敦子, 杉山太朗, 中村絵里, 西島義博, 高橋千果, 佐藤 茂, 三塚加奈子, 後藤優美子, 宇田優貴, 石井博樹

文 献

- 1) 松林秀彦, 鈴木隆弘, 平澤 猛, 内田能安, 村松俊成, 杉 俊隆, 和泉俊一郎. 産婦人科勧誘大作戦：研修医の興味の動向とスーパーローテート

における産婦人科教育の重要性. 日産婦誌 2006; 58: 770

- 2) 日本産科婦人科学会 産婦人科医療提供体制検討委員会. わが国の産婦人科医療の将来像とそれを達成するため具体策の提言 最終報告書. 日本産科婦人科学会 2007. 4. 12
- 3) 日本産科婦人科学会 女性医師の継続的就労支援のための委員会. 日本産科婦人科学会員の卒業2年から16年における就労状況について—女性医師の就労を中心として—. 日本産科婦人科学会 2007. 10. 5
- 4) 木下勝之. わが国の周産期医療の崩壊を防ごう. 日産婦誌 2007; 59: 1596—1603
- 5) 倉智博久. お産の危機 医療水準の維持が困難に. Medical ASAHI 2007; June: 27—29

Synopsis

Recently, we have decreased doctors dealing with Obstetrics and Gynecology (OB/GYN), which are based on the decrease in fresh doctors and the increase in retirement. How to get fresh doctors in OB/GYN is the hot topic in this symposium. I have tried to find how the 2nd year super-rotate doctors, the 4th and the 5th grade of the medical students in Tokai University think about OB/GYN by questionnaires in order to recruit fresh doctors in OB/GYN. The 2nd year of super-rotate doctors were interested in Oncology (53%), Obstetrics (50%) and Surgery (38%), however, 81~96% doctors have decided their choice on the one department already. Therefore, we should've focused on the medical students. The 5th grade of the medical students were interested in Oncology (66%), Obstetrics (64%) and Surgery (54%). OB/GYN were thought to be one of their choices in 23% students. They have possibilities to being OB/GYN doctors. Then, I have tried to ask questionnaires to the 4th grade of the medical students. They knew little about OB/GYN before the class, just knew what they can hear or read through media. Only one-hour class (by the author) changed their interests to the OB/GYN. Twenty-eight percent students became interested in OB/GYN after the class from 5% before the class. They were interested in Obstetrics (43%), Newborn (30%) and Psychology (28%), which were exactly same as my topics in the class. Therefore, students meet the teachers as what they did. In Tokai University, we have done many trials to recruit fresh doctors; making CDR for the super-rotate doctors, making web site to appeal outside doctors or students, making presentation at the local OB/GYN conference by the super-rotate doctors, discussing about anything with the super-rotate doctors and medical students with alcohol. The most important point, however, is the zeal; willing to recruit fresh doctors for all people in Japan. Every OB/GYN doctors should have the same intension to recruit OB/GYN fresh doctors with the zeal.